マチ

緒方水花里

ミモザマンマクリニックに大変惹かれている。ミモザ、マンマ、クリニック、そこには何があるんだろうと思う。ピンクの看板の乳腺外科。乳腺外科って始めて聞いた。おっぱいをどうするのだろう。その隣の隣の通りに耳の遠いおじいさんがやっている本屋がある。古本と新本がどちらも置いてあって、お客さんの声が聞こえないものだから、おじいさんは取り敢えず、こちら新刊！　新刊！　と大声を出す。やたら芥川賞を勧めてくる。おじいさんはきっとミモザマンマクリニックを知らない。私は本屋の中で聞こえるくらいの声で呟く。「ミモザマンマクリニック」。

ミとモの間に惹かれている。ミの後にすかさず下唇を上唇に付けなきゃならない。ミもモもマンマも一度唇を閉じないと発音出来ないのだ。この町の名前だって。昔城下町だった名残で町の道は碁盤の目のように格子状になっていて、自転車で走るととっても走り易い。ぐねぐねした道がない。でも、城下町だった名残で狭い通りが多くて一方通行が多い。車だと走りにくい。直進する車があるのに右折をする文化が生まれ、町の名前を冠して「○○曲がり」という。「○」も「○」も「曲がり」も唇を閉じないと発音出来ない。「○」、私は唇を破裂させる。唇が待っている。マと言った唇がすかさず破裂するのを待っている。

ミとモの間にあるのはムメのはずなのに、無名の所なんてない。通りには全て名前が付いていて、皆がその上で横断歩道が変わるのを待っている。青の点滅や、車が全く通らない時でも誰も絶対に渡らない。歩車分離式信号という、歩行者の信号が青になるまでの時間が長い信号が町には多いのに、誰も文句を言わないで待っている。その間に一体何回ほしゃぶんりたいと言えるのだろう、と私は文句を言う。もんく。これだって唇を破裂させる。